（1）総合的な学習への取り組み

① 最近の研究動向

「総合的な学習の時間」の実践が進みつつ、また、中央教育審議会への諮問から答申までの動きといった情報もあり、総合的な学習を進める上での課題が明確になってきている。その課題の中核となるものは内容編成にあるといえる。多くの学校では、これまでに総合的な学習の活動計画は作成されている。しかし、教科等の学習指導要領にあたる目標及び内容の編成が未整備のため、評価基準が作れていないなどの問題が出てきている学校もある。総合的な学習を通じてどんな価値的なことを児童生徒に身に付けるか、それが身に付いたか評価し、次の指導に生かすようにする。さらには、自己学習力の育成、外部への説明責任も視野に入れた研究の一層の推進が求められている。

② 「内容系列表」の作成

②−1 その作成の必要性

平成15年10月7日の中央教育審議会答申「総合的な学習の時間」の現状と実施上の課題等の文末に「…例えば、総合的な学習の時間」の「目標」や「内容」は、各教科等と異なり学習指導要領に示されておらず、各学校においては、学習指導要領に示された「総合的な学習の時間」の趣旨及びねらいを踏まえ、具体的にこれを定めて計画的に指導を行うことが求められる。…」という記述がある。

図1 教科と「総合的な学習の時間」の比較

この「目標」と「内容」とは何か、これは各教科等の学習指導要領に相当するものである。これを定めないと学習活動を行っただろうということになるだろうか。ここで、教科と「総合的な学習の時間」を比較しながら考えてみたい。

教科は、文部科学省が学習指導要領の「目標」と「内容」を作成する。学習指導要領には2章に分けて各教科、道徳、特別活動それぞれの「目標」と「内容」がシステム的に定められている。

次に、学習指導要領の「内容」を授業を通して実現できるように、教科書会社が教材を決め、単元・題材を作り、教科書を編纂する。

そして、各学校で先生方が学校、地域、児童生徒の実態等を考えて教科書の単元・題材に調整を加えながら授業を行っているのではないだろうか。あるいは、学
習指導要領を足場にして独自の教材を開発したり、単元・題材の開発を行っている学校もあるかと思う。

では、「総合的な学習の時間」についてはどうだろうか。＜図１＞に教科と「総合的な学習の時間」の授業までの流れを示してみた。「総合的な学習の時間」には、二つのねらいが示されているだけである。では、だれがそれを創るかといえば、各学校で先生方が創らなければならない。さらに、各学校で創った「目標」・「内容」を足場にして、学校、地域、児童生徒の実態から適切であると思われる教材を決めるとき、単元を開発したりしなければならない。だれがそれを行うのかといえば、これも各学校で先生方が行わなければならない。最後に授業を実施し、その結果を評価してカリキュラムの修正を続けていくわけである。各教科等も「総合的な学習の時間」も基盤の整備においては同じ手続きを踏むことになるといえる。

②—２ その特質
内容の編成にあたって～ねらいは「生き方」～
内容編成にあたって学習指導要領総則に示されている「総合的な学習の時間」の二つのねらい（資料１）がよりどことなる。

資料１ 総合的な学習の時間のねらい

1. 自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育むこと。
2. 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

この二つのねらいと、先行した教育課程審議会答申（資料２）を比較してみると内容的に「総合的な学習の時間」のねらいが①～④の四つに整理できることが分かる。

資料２ 教育課程審議会答申（平成10年7月29日）

1. 「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育むこと」
   ※(1) とそのままである。いわゆる「生きる力」の知的側面である。
2. 「情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表、討論の仕方などの学び方やものの考え方を身に付けること」※(2)の冒頭の部分である。
3. 「問題の解決や探究活動に主体的・創造的に取り組む態度をそだてる。」
   ※(2)の2番目の文節である。
4. 「自己の生き方についての自覚を深めること」
   ※(2)の文末の自己の生き方を考えることができるようにすることと同じである。（※是、筆者）

資料２の①～③は、「学び方」にかかわるねらいであり、④は、「生き方」にかかわるねらいといえる。そこで、改めて教育課程審議会の「教育課程の基準の改善のねらい」（資料3）を振り返ってみると、上記の①～③は、いの「自ら学び、自ら考える力を育成すること」に重なる。したがって、①～③は「総合的な学習の時間」のみならず、各教科、道徳、特別活動をも含めた教育課程全体を通して目指すべきねらいといえよう。「学び方」にかかわるねらいは「総合的な学習の時間」でも目指すが、「総合的な学習の時間」特有のねらいではない。残る④こそが「総合的な学習の時間」特有のねらいと考えられる。
資料3 教育課程の基準の改善のねらい

ア 豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること

イ 自ら学び、自ら考える力を育成すること

ウ ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を
生かした教育を充実すること

エ 各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること

「総合的な学習の時間」には、このように「学び方」と「生き方」の二つのねらいがあ
り、「学び方」は「生き方」を主体的、問題解決的に探究することとの関連において身に
付けるものといえばえよう。
以上のようなことを踏まえ、各学校で内容編成（内容系列表）する際の留意点について述べると、以下のようないろわれられる。

ア 「総合的な学習の時間」の「ねらい」には、学び方と生き方の二者が示されてい
る。内容編成は、主に自己の生き方を考えられるよう具体化を考えて作成する。

イ 内容については学習指導要領で示された三つの課題を参考にする。先進的な実践
などを参考にして示されたものであり、よりどこところとすると無理がない。

ウ これまで実践してきた単元を通して、どのような子どもの育ちが現れたか、ある
いは、現れる可能性があるのかを教師間で出し合って文章化する。その際、学年の
発達段階に沿って内容項目の関連性や発展性、系統性を考慮して内容を配置する。

エ 内容を活動や教材のレベルで記述すると自由度が制約されてしまうので可能な限り
資質・能力で書き、教材や活動を含まないようにする。各教科等の指導要領の内容
に相当するものなので、抽象度の高い文書となるようにする。

オ 単元を修正しながら実践しても、うまくいかない場合は内容自体を変えていくこ
とも必要である。常に、授業や子どもの実態をとらえて内容系列表を修正し続けて
いくことが必要である。

次に、このような点に留意しながら作成された「富岡市立一ノ宮小学校の内容系列表20
03年版」および「内容系列表 群馬県教育センター試案2002年版」を掲載することにすると（小
学校と中学校を分けて掲載）、次頁のようにある。

表の左側の「国際理解」「情報」「環境」などが領域である。算数科でいえば内容領域
（「数と計算」「量と測定」「図形」など）に相当するものといえよう。そして、領域の内
容欄のア、イ、ウなどが内容項目になる。これは、領域の目標を意味的に分析し、要素に
分解した結果から導き出されたものである。算数科でいえば「数と計算」領域の下にある
「分数の乗法及び除法の意味について理解し、それを適切に用いることができるように
する」や「図形」領域の「身近にある図形について、その概形をとらえ、およその体積を
求めることができるようにする」などの内容項目に当たる。

一方、これらの内容項目を学年発達（ここでは学年段階ごと）に応じて具体化する。
このように、縦列に内容（スコープ）を、横列に校種・学年別の児童生徒の発達的特質
（シーケンス）を配置しながら内容を編成していく。

教科では、子どもの育ちを評価していく場合、目標・内容から評価規準を設定し評価し
ていく。「総合的な学習の時間」についても同じことがいえよう。子どもたちにどのような
<table>
<thead>
<tr>
<th>自分の生き方を考える視点</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>中学年度内容</td>
</tr>
<tr>
<td>自分たちの生活と学校の環境との関係に様々な関連性があることに気づき、できる範囲で積極的に環境保護に努めようとする。</td>
</tr>
<tr>
<td>人との関係で必要な事項や問題に関心を持ち、それを実現するために必要な行動・態度を身に付ける。</td>
</tr>
<tr>
<td>高学年度内容</td>
</tr>
<tr>
<td>自分たちの生活を、人々の支え合いを助ける上で上手く立っていることに気づき、人権が尊重される社会の実現に努めようとする。</td>
</tr>
<tr>
<td>人との関係で必要な事項や問題に関心を持ち、それを実現するために必要な行動・態度を身に付ける。</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>地域・文化</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>中学年度内容</td>
</tr>
<tr>
<td>総合的な思考・判断</td>
</tr>
<tr>
<td>学習活動にかかる技術・表現</td>
</tr>
<tr>
<td>類似の学習活動の見通し、見通しをもって学習しようとする。</td>
</tr>
<tr>
<td>必要な情報を用いた学習方法を用い、学習に活用しようとする。</td>
</tr>
</tbody>
</table>
| 自分の生活を、自分たちが解釈のための知識を積み重ね、そこで成果を積み重ねる。
| 高学年度内容 |
| 人と自然 |
| 人との関係で必要な事項や問題に関心を持ち、それを実現するために必要な行動・態度を身に付ける。 |
| 人との関係で必要な事項や問題に関心を持ち、それを実現するために必要な行動・態度を身に付ける。 |

<table>
<thead>
<tr>
<th>自分の生き方を考える視点</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>地域・文化</td>
</tr>
<tr>
<td>中学年度内容</td>
</tr>
<tr>
<td>自分たちの生活を、人々の支え合いを助ける上で上手く立っていることに気づき、人権が尊重される社会の実現に努めようとする。</td>
</tr>
<tr>
<td>人との関係で必要な事項や問題に関心を持ち、それを実現するために必要な行動・態度を身に付ける。</td>
</tr>
<tr>
<td>高学年度内容</td>
</tr>
<tr>
<td>自分たちの生活を、人々の支え合いを助ける上で上手く立っていることに気づき、人権が尊重される社会の実現に努めようとする。</td>
</tr>
<tr>
<td>人との関係で必要な事項や問題に関心を持ち、それを実現するために必要な行動・態度を身に付ける。</td>
</tr>
<tr>
<td>領域</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
</tr>
<tr>
<td>国際化</td>
</tr>
<tr>
<td>理解</td>
</tr>
<tr>
<td>情報</td>
</tr>
<tr>
<td>環境</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>福祉</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

- 491 -
<p>| 祉 | 生命のすばらしさや尊さに気付き、自他の命を尊重する心をもったり、心身共に健康で安全な生活を営んだりすることができる資質・能力を育てる。 | 生命を尊重し、大切にしようとする態度 | 動植物の生体や生態環境に関心をもったり、自分の成長を振り返ったりする活動を通じて、生命のすばらしさや大切さに気付き、生命を大切にすることができるようにする。 | 自分たちが居住している地域に愛着をもち、家庭や学校を含めた地域の生活上の諸問題について理解を深め、自他を尊重しつつ、地域社会の一員としてよりよい民主的な生活の実現に意欲的・協力的に取り組むとする資質・能力を育てる。 | 地域の伝統・文化、行事・生活習慣・政治・経済・産業などの現状や問題点の理解 | 地域を探検したり地域を支える人々との交流を通じて、地域の人々の思いや願いを知ると共に、地域への関心や愛着をもつ。 | 地域社会の一員として、地域の生活や文化等を守り、受け継ぐと共に、よりよい郷土を創るために自分たちのことを考え、取り組む。 | 職業の大切さや労働の意義について理解すると共に、自己の適性や将来について考え、個性豊かによりよく生きていくことができる資質・能力を育てる。 | 職業活動を通じての職業観・労働観の拡充 | 自己の価値観の確立 | 家族や学校、地域での仕事にふれ、それが自分たちの生活を支えていくことを知り、働くことの大切さに気付く。 | 職業活動を通じて職場見学、地域の人と共にお働くことをを通じて、働くことの喜びや苦労、それぞれの職業の大切さを実感する。 | 自己の適性や将来について考え、自己をより高めていく。 |</p>
<table>
<thead>
<tr>
<th>領域</th>
<th>領域の目標</th>
<th>領域の内容</th>
<th>中学校1・2年</th>
<th>中学校3年以上</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>国際化の進展に対する理解</td>
<td>人と人との相互理解・相互交流を基本に国際化の進展に対処することができるよう、日本や世界の国々の歴史や文化に関心をもち、異文化交流を通して異文化を理解し尊重し、国際社会の一員として共生することができる</td>
<td>ア異文化交流及び異文化理解を学会で研究し、異文化を尊重する意識を涵養する</td>
<td>ア他国の歴史や文化での学習を通じて、国際的な視野を養う。</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>問題解決</td>
<td>イ共生（国際交流・協調）</td>
<td>イ異なる立場や考えの人が、自分にどのような影響を及ぼすかを考え、活用する。</td>
<td>イ様々な国の人民と積極的に交流し、国際視野を養う。</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 情報の収集と活用

<table>
<thead>
<tr>
<th>領域</th>
<th>領域の目標</th>
<th>領域の内容</th>
<th>中学校1・2年</th>
<th>中学校3年以上</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>問題解決</td>
<td>様々な学習や生活との関連において、多くの情報の中から自分に必要な情報を収集・選択し活用することができる</td>
<td>ア情報収集と活用</td>
<td>ア課題や目的に応じて情報手段を適切に活用し、必要な情報を収集・選択・整理・処理し、生活に生かすことができる。</td>
<td>ア課題や目的に応じて情報手段を適切に活用し、収集・選択した情報を判断し、解析する。社会生活においては情報技術を活用する。</td>
</tr>
<tr>
<td>自然環境</td>
<td>身近な自然に感謝しつつ大切にいる。生活と環境とのかわりについて理解を深め、自然と共生し、学びたい環境創造をする</td>
<td>ア自然に対する感謝性や環境への関心</td>
<td>ア多様な視点や論理で地球規模の自然を理解し、自然保護に必要な生活の一環を考える。</td>
<td>ア地球規模・地球規模の環境問題、自然破壊等を多様な視点から科学的に分析し、産業や自然環境とのあくまでも考え。</td>
</tr>
<tr>
<td>自然環境</td>
<td>ア環境問題と生活様式の関係</td>
<td>ア生活様式の多様性を理解し、環境問題を解決する</td>
<td>ア人間と環境との関係性を幅広く考える。環境問題を解明し、人間の責任と役割について理解し、よりよい自然との共生について考え。</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 自分を含む、様々な人々が共に生きがいをもって生きようとしていること、そのためにお互いに助け合う

<table>
<thead>
<tr>
<th>領域</th>
<th>領域の目標</th>
<th>領域の内容</th>
<th>中学校1・2年</th>
<th>中学校3年以上</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>自他者への尊重・尊敬</td>
<td>自分を含め、様々な人々が共に生きがいをもって生きようとしていること、そのためにお互いに助け合い</td>
<td>ア他者への尊重・尊敬</td>
<td>ア地域の人々との交流や体験活動を通じて、高齢者や障害者などを正しく認識すると共に、互いの違いや個性を認め合い、尊重し、思いやりをもって接する。</td>
<td>ア誰もが障害をもつ可能性があり、高齢者や障害者を先頭に、高齢者や障害のある人々の存在を尊重。</td>
</tr>
</tbody>
</table>

---

- 493 -
| 生命の尊厳を尊重し、大切にしようとする態度 | 平等な生きる権利があることを認識する。 |
| 生命の尊厳を尊重する心をもったり、心身共に健康で安全な生活を営んだりすることができる資質・能力を育てる。 | イボランティア活動などを通じて様々な福祉にかかわる問題にかかわる現実社会の理解を深め、ボランティア活動などとの体験を通じて福祉に対する理解を深める。 |
| イボランティア活動などを通じて様々な福祉にかかわる問題を認識し、福祉政策や社会的な福祉サービスが対等の生活原理であることが分かる。 |
| 千年歩きの社会の実現に貢献する。 | ウ身近な福祉問題の解決やよりよい福祉社会実現への様々な取組みやそれに携わる人々の気持ちや考えを知り、自分ができることを発信したり、実践したりする。 |
| ウ福祉にかかわる様々な問題について、日本と他の国の取組とを比較したり、福祉政策の問題点について分析したりして、考えをまとめ、提案として発信していく。 |

| テーマ | 資質・能力を育てる。 | テーマ | 自分たちが暮らしている地域に愛着をもち、家庭や学校を含めた地域の生活上の問題について理解を深め、他を尊重しつつ、地域社会の一員としてよりよい民主的な生活の実現に意欲的、協力的に取り組むことができる資質・能力を育てる。 |
| 地域 | ア地域の伝統・文化・行事・生活習慣・政治・経済・産業などの現状や問題点の理解 | 地域 | ア地域社会を構成する一員としての自覚と誇りをもち、他と協力してよりよい郷土の創造を目指した取り組みを行う。 |
| 領域 | ア地域社会の現状や問題点を政治、経済、産業等、多面的、多角的な視点からとらえる分析・判断し、解決しようとする。 | 領域 | ア地域社会を構成する一員としての自覚と誇りをもち、他と協力してよりよい社会の実現を目指して、その発展に尽くそうとする。 |
| 運 | 職業の大切さや労働の意義について理解すると共に、自己の適性や将来について考え、個性豊かになりよく生きていくことができる資質・能力を育てる。 | 運 | ア職業調査や職場体験を通して、働くことの喜びや厳しさ、働く人たちの仕事に対する思いや責任感にふれ、労働の意義について考える。 |
| 路 | イ自己の適性や将来の職業選択を視野に入れ、自己を高めっていくために何が必要か考え、取り組むようとする。 | 路 | イ現在や将来を真剣に考え、様々な社会参加の在り方や生き方の選択肢があること、生きがいをもって充実した人生を送ることの意味等を考える。 |
な価値的な育ちを身に付けてほしいのかを考え、そのためには、どのような単元を組み、子どもたちに身に付いたかを評価していくために、内容系列表を基にしていればいいわけである。

また、この実践では、小・中学校間の一貫性をもたせたものとなっている。今後は、各中学校区内を単位にしながら、小・中学校の連続性を視野に入れて内容編集することが望まれる。

（2）実践校の紹介

群馬県富岡市立ーノ宮小学校

① 学校所在地等

・学校の所在地 〒370-2452 群馬県富岡市ーノ宮16番地

・現在の学年別学級数及び児童数

<table>
<thead>
<tr>
<th>学年</th>
<th>1学年</th>
<th>2学年</th>
<th>3学年</th>
<th>4学年</th>
<th>5学年</th>
<th>6学年</th>
<th>特別支援</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>学級数</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>13</td>
</tr>
<tr>
<td>児童数</td>
<td>74</td>
<td>75</td>
<td>72</td>
<td>69</td>
<td>64</td>
<td>77</td>
<td>2</td>
<td>433</td>
</tr>
</tbody>
</table>

・教職員別人数

<table>
<thead>
<tr>
<th>校長</th>
<th>教頭</th>
<th>教諭</th>
<th>養護教諭</th>
<th>事務職員</th>
<th>非常勤講師</th>
<th>教員補助職</th>
<th>心の教諭相談員</th>
<th>図書事務職</th>
<th>校務員</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>19</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>31</td>
</tr>
</tbody>
</table>

② 学校の沿革

本校は、富岡の中心部から西へ3キロ、『一番初めはーノ宮』とうたわれるように国指定重要文化財の貴前神社の門前町として発展してきたところである。歴史的建造物や古墳、城跡、郷土芸能などの文化財が数多く残されており、歴史学習や地域を学ぶ学習には、適している。さらに、公民館、郵便局、消防署、合同庁舎等の施設も有し、多様な学習の場や機会を提供できるところである。保護者の教育的関心は高く、P.T.A.活動を始め、学校の教育活動はも協力的である。児童は、明るく活動的であいさつや返事などもよくできるよう面がある。反面、自然体験や社会体験などの不足から、自立の遅れや社会性の低下が心配されるところがある。保護者にアンケートをとったところ、主体的に進んで物事に取り組む姿勢や思いやり、協調性などの伸長が期待されている。

本校は、平成11年度より文部科学省指定の研究開発学校として3年間、総合的な学習の時間の研究に取り組んできた。「自ら問題解決に取り組み、仲間と共によい生き方を追求する児童」を育成するため、学校や地域の特色を生かした総合的な学習の時間を創設し、各教科等との関連を図りながら、これからの教育課題に対応する教育課程の編成・実施の在り方を探ってきた。また、総合的な学習の時間の目標・内容・評価系表を作成し、年々更新をしている。

昨年度は、新学習指導要領の実施に伴い、「夢・人・里」の時間（総合的な学習の時間）の年間指導計画の整備、単元開発の改善・充実、評価の改善・充実（とりわけ、振り返り活動を通して自己評価・相互評価の推進）を図ることを目標に努力してきた。
本年度は、児童の表現力の育成に力を入れ、各学年ごとに目標を設け、研究・実践を進めている。

群馬県前橋市立芳賀中学校
①学校所在地等
・学校の所在地 〒371-0131 群馬県前橋市鳥取町796番地

・現在の学年別学級数及び生徒数

<table>
<thead>
<tr>
<th>学年</th>
<th>1学年</th>
<th>2学年</th>
<th>3学年</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>学級数</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>3</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>生徒数</td>
<td>116</td>
<td>122</td>
<td>118</td>
<td>356</td>
</tr>
</tbody>
</table>

・教職員別人数

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>校長</th>
<th>教頭</th>
<th>教諭</th>
<th>教護教諭</th>
<th>新採研指導</th>
<th>補充教諭</th>
<th>ALT</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>人数</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>17</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>23</td>
</tr>
</tbody>
</table>

②学校の沿革
本校は昭和22年創立。その後、昭和58年に現在の校舎となる。

教育目標として、心身ともに健康で、高い知性と特性を持ち、よいことをすすんとする生徒を育成することを掲げている。

また、学校のスローガンである「学べ 鍛える 夢を持つ」が校役に大きく飾られ、生徒および職員がそれに向けして日々努力している。

今年度の重点の一つが生きてはたらく「基礎学力」の充実である。その中の具体項目の一つが「ねらいにせまる総合的な学習の時間の計画作成と適切な実施及び改善」であり、本年度より取り組んでいる。

（3）年間単元指導計画の作成
実践校の年間単元指導計画の一部を以下に示した。実施学年、実施時期（期間）、単元名、単元の目標、実現する内容、単元の評価規準である。

富岡市立一ノ宮小学校の単元「世界へとびだそう！ぼくは地球人」では、前出の富岡市立一ノ宮小学校内容系列表に示された「国際理解」「文化伝統」の2つの内容を指導しようとしていることが分かる。

前橋市立芳賀中学校の単元「自分とのかかわりを考えながら、身の回りの課題を調べみんなに発表しよう」では、内容系列表（群馬県教育センター試案2003年版）の「生命・健康」の内容を指導しようとしていることが分かる。

富岡市立一ノ宮小学校
＜小学4年＞

<table>
<thead>
<tr>
<th>月</th>
<th>単元</th>
<th>単元の目標</th>
<th>内容領域</th>
<th>単元の評価規準</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>11</td>
<td>世界の国々や外国の人々の生活、文化などを調べたり、地域に住む外国の人々と交流したりする活動を通じて、自分たちと外国の人々の生活や文化の違いを知る。</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>地球に関する全般的な内容を学ぶための準備活動。</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

**前橋市立芳賀中学校**

＜中学1年＞

<table>
<thead>
<tr>
<th>月</th>
<th>単元</th>
<th>単元の目標</th>
<th>内容領域</th>
<th>単元の評価規準</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1月</td>
<td>自分の食生活を中心にした人間と他の生物との関係を学ぶ。</td>
<td>〇生命・健康</td>
<td>〇関心・意欲・態度</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2月</td>
<td>体調を観察したりディティールの観察を通して、自分自身の体調を観察し、健康せんべいの種類も工夫する。</td>
<td>〇思考・判断</td>
<td>〇能力・表現</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3月</td>
<td>はじめ身の回りの様々な生活が互いに関係し合い生きている。</td>
<td>〇知識・理解</td>
<td>〇関心・意欲・態度</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

①自分の生活と外国の生活の違いを知ることができる。
②自分たちの生活と外国の人々の生活との違いを知ることができる。
③日本に住む外国の人々がまっていることを考え、自分たちの生活と外国の生活を比較することができます。

〇思考・判断
①自分の生活と外国の生活の違いを知ることができ、交流したりしてきたことを他の人に分かりやすく伝えるために、用紙や道具を適切に使うことができる。

〇知識・理解
①外国の人々と自分たちとの関係には、考え方や生活の仕方、文化などにそれぞれが異なることにあることが知ることができる。
<table>
<thead>
<tr>
<th>全30時間</th>
<th>で題考をえ調べる。 それがみならに発表しよう。</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>されていることに気づき、生命の尊さや自他の生命を尊重する心を育てる。</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
ながら単元指導案の様式に仕上げていく。
＜②：単元名及び学習活動の決定に関して＞

単元名は、そこで児童生徒のどのような問題解決が展開されるか分かるようなものがよい。次に、そのような問題解決の活動を通じて実現される内容を検討する。これは、各学校で編成する内容系列表に示されているものである。

その際、活動と内容が教科（生活科を除く）のように1対1で対応しないことが多い。これが実験単元の特色ともいえる。

生活科を例に考えてみたい。生活科は、その多くが経験単元で構成されている。「あきみつけ」の単元では、児童がやりたい活動である秋の公園を行って楽しく遊ぶ活動を通じて、結果的に内容（4）「公園物の利用」、内容（5）「四季の変化」、内容（6）「遊びの工夫」などの複数の内容を実現するようにする。活動と内容が1対多で対応する。したがって、一つの単元で複数の内容が実現されることがある。「総合的な学習の時間」についても同様のことがいえるのである。

＜③～④：「教師の願い」の決定及び「子どもの実態」の記述に関して＞

単元指導案を作成するときには、考察（単元設定の理由）として単元にかかわる児童生徒の実態と、この単元を通して目指したい子どもの姿（教師の願い）を記述する。その際、「総合的な学習の時間」についても教科と同様に観点別に記述する。

すなわち、この単元を通じて学習指導されることになる内容や望ましい児童生徒像を教師の願いの欄に、単元の指導展開の概要とともに記述する。次に、教師の願いから現実の児童生徒像の実態を観点ごとに明らかにして、その特質を子どもの実態の欄に記述する。

具体的には、その題材にかかわる現在の子どもの関心・意欲・態度の状態を書き、この単元を通じて実現したい関心・意欲・態度の状態を書く。同様に思考・判断、技能・表現、知識・理解についても記述していく。これによってどのような活動を組み、どのような投げかけをして、どのような支援をすればよいかが見えてくる。

＜⑤：単元の目標の決定に関して＞

既述の内容に基づきながら単元の目標を決定していく。その際、留意する点として、これまで四つの評価の観点別に目標を記述していた学校もあるようだが、ここでは、単元の評価規準として記述されることになることを考え、単元の目標は「～という活動を通じて、・・・に気付き、考えて、理解し、表現し、～ができるようになる」というように一定で表すこととした。

＜⑥～⑦：単元の評価規準の作成に及び学習過程における単元の評価規準の具体化と評価資料の決定に関して＞

単元の目標を四つの評価の観点別に具体化したもののが単元の評価規準になる。評価規準を幾つか設けるかは単元の目標によって変わってくる。次に、指導計画（活動の展開と評価計画）を作成する。学校ごとに決められた様式があると思うが以下のようなフォーマットを使うこととした。

「活動の展開と評価計画」のフォーマットの例（九数字は観点別の評価規準を示している）

<table>
<thead>
<tr>
<th>学 習 活 動</th>
<th>支 援</th>
<th>評 価 規 準</th>
<th>評 価 資 料</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>(方法・内容)</td>
<td></td>
<td>関意態</td>
<td>思判</td>
</tr>
</tbody>
</table>

— 499 —
学習活動に即して支援を行うか、また、学習活動及び支援のいつ、どの場面で、どの評価基準の達成状況を評価するか、その計画を具体化していく。4観点別に作成する単元の評価基準に①〜③といったように、○付き数字をつけておくおけば、その位置付けがより明確となる。また、評価基準の達成状況を事実的に判断するための評価資料を特定し、該当する評価基準に沿いながら記述していく。

＜⑨：評価基準の設定に関して＞
さらに、評価資料から評価基準（達成目標のめやすであり、「～できる」表記をする）の達成状況を判断しなければならない。そのためには評価資料を特定するとともに、達成状況を絶対評価するための評価基準（達成目標の実現状況の指標であり、「～している」「〜と記述している」「〜できている」など事実的・行動的に表記する）を作成することが望ましいと考える。これは、各評価基準の学習実現状況を事実として判断するための具体的な指標である。

子どものどのような学習状況であれば、または評価資料にどのような記述があればA（十分満足できる）なのか、B（おおむね満足できる）なのか、C（努力を要する）なのかが、どこで実施されても、だれが行っている評価結果を導けるように評価基準を設定することが必要になる。

今回、次のようなフォーマットを用い一覧表を作成して実施した。A、B、Cの3段階よりなる評価基準を設定し、Aは3点、Bは2点、Cは1点を付与することとした。

「評価基準表」のフォーマットの例

<table>
<thead>
<tr>
<th>学習活動</th>
<th>評価基準</th>
<th>学習活動における具体的な評価基準</th>
<th>評価資料</th>
<th>評価基準</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1〇〇しよう。</td>
<td>思考・判断</td>
<td>･･･することができる。</td>
<td>カード1</td>
<td>A(3) B(2) C(1)</td>
</tr>
<tr>
<td>①〜〜を調べる。</td>
<td>②</td>
<td></td>
<td>･･･している。</td>
<td>･･･している。</td>
</tr>
</tbody>
</table>

＜⑩：評価の3つの機能への対応計画の決定に関して＞
このような評価基準や評価基準を設けることで、単元を通して、それらを意識した指導・支援を行うことができる。さらに、評価結果から指導や単元等の修正・改善が図られ、指導と評価の一体化も具体化できると考える。

また、自己学習力の向上、保護者等外部への説明責任に向けた評価の工夫に関する計画を予め構想し、記述していくようにしたい。

（5）授業と評価の実践に向けて
これからの評価は、指導の改善に資する評価として指導と評価の一体化が図れるものの、子どもの自己学習力の向上が図れるもの、外部への説明責任が果たせるものが求められる。
今回の総合的な学習の評価の取組は、この上記の役割の具体化を図ろうとしたものである。

①指導と評価の一体化の工夫
子どもの学習のつまずきが学習過程のどこで起こったのか、指導のどこを改善すればよいかといったプロセス重視の評価が行われることが大切である。この喫みは授業の最初から最後まで絶えず進められなければならない。教師は、そのためにあらかじめ策定した単元指導計画に基づき指導を行う。そのもとで、子どもが学習活動を展開する。

教師は、観点別の評価基準の実現状況を学習の過程及び成果に関する学習資料・情報を基にA〜Cの絶対評価をする。その評価結果を基に、指導計画を予定通り進めるか、あるいは修正・改善をするかを判断し、その後の指導に臨む。これを1サイクルとする指導と評価の連続が指導と評価の一体化の実質であると考えられる。

実践事例には、学習過程にブレッドされた各評価基準の評価場面ごとに、それまでの指導の特質を記述し（①指導・学習の過程→子どもの学習資料・情報から単元の評価基準の実現状況を評価して記録し、考察する（②評価結果）→評価結果に基づいて次の指導をどのように改善し指導したかを記述（③指導の改善と実施）の体裁を工夫した。

②自己学習力の向上に向けた工夫
「生きる力」の育成のためには、児童生徒が自分で学習目標を決め、そのための計画を立て、友達と協力しながら自己追究し、その問題解決の過程で絶えず自己の活動の過程及び成果を学習目標に照らして評価し、やがて解決にいたるという自己学習力を身に付けることが大切である。

今回、各単元ごとに自己学習力の育成と向上を意図して取り組んだ。その際、二つのレベルを考えた。一つは、教師主導のもので児童生徒が学習活動及び評価活動を展開するというレベルである。もう一つは、教師の支援のもとで児童生徒が自己の目標なり評価基準を定め、その実現に向けた学習活動を展開し、その学習の過程及び成果を振り返る（自己評価する）といったレベルである。

＜第一のレベル＞への対応
ア、教師による問題解決授業の工夫
児童生徒が一連の問題解決を行う授業と、その中で自己評価を求めるような発問等に取り組む。

イ、授業中に実施する具体的な評価活動における工夫
・評価基準を予め説明してから児童生徒の自己評価を求める。
・学習カードにコメントしたり、アンダーラインを引く場合、教師の意図（評価規準や評価基準等）が児童生徒に伝わるようにする。
・学習カードへの記述を求める際、予め学習カードを等を提示したり、その評価基準を説明したりする。
・集積していくポートフォリオを授業中に活用し、学習のあとを振り返り、次に備えたり、授業終了時にまとめポートフォリオを作成する。さらに、家庭に持ち帰り保護者のコメントをもらい、次の学習に活用する。

＜第二のレベル＞への対応
ア、例えば中間発表を経て最終発表に向けた活動に取り組み、最終発表に臨むといったような機会の面をとり、児童生徒が自己の目標なり評価基準・さらには評価基準を設定し、活動を展開し、その話を振り返る（自己評価）といった評価活動を展開する。なお、第一レベル、第二レベルを問わず、いずれのケースの評価活動においても、実施したそれぞれの評価の工夫について児童生徒から感想・意見を求めることとした。

③外部への説明責任に向けた工夫
保護者等外部への説明責任に向けた評価のためには色々な機会や場面における工夫が考えられる。とりわけ指導要録の作成や通知表の作成も視野に入れながら、各単元における総括的評価及び個人の評価の工夫を行った。
＜単元ごとの総括評価に向けて＞
既述の通知表や指導要録の記載のためにも、各単元ごとの評価結果は残しておくことが必要である。年間１単元であっても途中の評価結果を適宜保存しておくようにする。
次に、評価の４観点別に評価する単元の評価基準の実現状況を複数回以上評価することにしたが、いつ、どの場面における評価結果をその単元における総括的な評価結果として保存するかが問われることになる。
その場合、単元に応じて柔軟に考え、ある観点に関しては指導と学習の過程で複数回以上にわたって行ったすべての評価結果の総和を出して総括的な評価結果としてもよいし、ある観点に関してはある一部の特定された場面における評価結果で代表させてもよいことにした。
また、評価結果を文章記述するにしても評価結果の得点化を考えておけば好都合であると考えたところから、評価基準の達成状況を判断するための評価基準を３段階に区分して具現化し、それぞれ「A：十分に満足できると判断されるもの」を３点（80％以上相当の達成）、「B：おおむね満足できると判断されるもの」を２点（60％〜79％相当の達成）、「C：努力を要すると判断されるもの」を１点（59％以下相当の達成）として考えていくことにした。
さらに、次の図のような学習活動の展開に沿って評価される各４観点別の評価結果を個人ごとに記録していく「個人評価結果表」を作成することにした。縦列に児童生徒の氏名欄をとり、横欄には学習活動の展開に対応しながら評価される具体的な評価規準を記しておく。そして、縦列と横列の交差するセルに、児童生徒ごとの評価基準に基づく評価結果（A、B、Cないしは3、2、1）を記入していく。

### 個人評価結果表

<table>
<thead>
<tr>
<th>学習活動</th>
<th>学習活動 １</th>
<th>学習活動 ２－①</th>
<th>学習活動 ２－②</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>氏名</td>
<td>関①</td>
<td>思①</td>
<td>関①</td>
</tr>
<tr>
<td>評価基準</td>
<td>技①</td>
<td>関②</td>
<td>思②</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>知①</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

このような「個人評価結果表」を作成しておけば、指導・学習の過程における評価結果

---

502
の状況を即時に算出し、事後の指導・学習に生かしていくことが容易になる。また、単元終了時における学年あるいは学級全体の、あるいは個人別の、観点別総括評価結果の算出も容易に行える。

なお、単元の総括的評価に関連して、中には、必ずしも評価の四つの観点それぞれを等価値的には扱わず、単元に応じて四観点相互の重みを変えて評価していくとする論調もみられるが、今回、評価の四つの観点はどの単元においても等価値的に扱っていくことにした。なぜなら、評価の四つの観点はいずれも自己教育力の育成を構成する資質や能力であり、どれ一つを欠いても児童生徒の学びは成立しないと考えるからである。

＜単元における個人内評価に向けて＞

総合的な学習の時間においては、「児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価すること」という個人内評価を行うことが力説されている。その際、教科と同様の評価の4観点を踏襲しながら個人内評価を行うことが可能であると考えた。評価の四つの観点相互の発達的特質をみれば（観点間関係時的評価）、子どもの発達の強みならび方や課題がみえてくるし、また、四つの観点それぞれごとの発達的特質をみれば（観点内間関係時的評価）、それぞれの観点におけるその子どもの伸びや進歩の状況がみえてくると考えた。

まず、観点間関係時的評価についていえば、例えば単元の総括的評価結果をみれば、子どもの発達の4観点別にそれぞれいかなる評価結果を得たかが分かる。四つの観点ともに十分に満足できるように育ったか、あるいは、ある観点の育ちが他の観点に比べて遅滞しているかなどが分かる。そして、このような四つの観点相互の発達的特質を指導・学習の流れに即して、その推移の特質を明らかにする。そして、このような評価の四つの観点相互の縦断的特質に関する評価結果を次の指導の改善に生かしたり、あるいは子どもに、そして保護者に、返しながら子どもの自己学習力の向上に活用しようと考えた。

観点内関係時的評価に関していえば、評価の四つの観点別に、それぞれの観点における育ちを指導・学習の最初から最後まで時系列的に追えば子ども個々人ごとの伸びや進歩等の発達的特質が明らかになる。そして、これらの評価結果を、適宜、指導の改善に生かしたり、子どもの自己学習力の向上に役立てることが計画された。